

実技検査・面接・小論文

1 実技検査

60年度に一般入試で実施した国立大学は55大学(59%)、62学部(18%)で、前年度と同数であった。これらのうち、兵庫教育大学・初等教育教員養成課程は2次試験で音楽・美術・体育の実技適性検査を課し、59年度から成績を点数化している。①これと、入学後における必修の実技系科目の成績との比較、②これと、実技教育研究指導センターにおける自学自習による課題達成度との関係について、調査を始めた。

2 面接

60年度に一般入試で実施した国立大学は39大学(41%)、53学部(15%)で、前年度より微増した。山梨医科・滋賀医科・佐賀医科の3医科大学では数年来個人面接に関する研究が続けている。そこでは、①面接試験官の評点の比較や相関・分散の調査、②面接成績と入試成績や高校成績との相関調査の全部または一部が行われた。後者に関し山梨医科大学による次の分析は新しい。すなわち、面接成績と1次・2次の各教科・科目単位の入試成績の相関係数を計算し、他方、1次・2次の各教科・科目の相互間の入試成績を計算して、比較すると、後者には素質の面では互いにあまり関係のなさそう

な教科・科目の間(例えば、1次の国語と2次の物理)でも、面接成績と学力試験の成績の間(例えば、面接と1次の理科)の間よりは相関がある。勉強量の多さ、その結果暗記した知識量の多さの点に由来するのだろうか。後者の点を確かめるために、数学5問、物理・化学・英語各3問の間で相関係数を計算したところ、これらの方が、面接成績と各教科・科目の成績との相関係数よりかなり大きいことが分った。これら調査の結果、面接評価が1人10分程度では不十分でより多くの時間をかける以外に改善策はなかろうと示唆されている。面接で評価しているものと、学力試験で評価しているものとの質の違いも、大きく関係していると思われるが、面接で何を測るべきかは、今後とも検討課題ではなかろうか。

平野光昭氏他(入研協第4プロジェクト)は、この共同研究の一環として全国立大学を対象とする面接関係の質問紙調査を実施した。このような大規模な面接の研究は初めてであるので、調査結果をやや詳しく紹介する。①大学または学部・学科単位で調査され、回答は248件、うち、「面接を行っている」41、「一部だけ面接を行っている」118(推薦入学・帰国子女特別入試・2次募集)、「行っていない」83であった。面接は一旦採用されると多くの場合継続実施されている。②個人面接は126件、集団面接は22件で1グループ3人と5～6人にピーク

があり研究の余地が大きい、個人・集団の両方は19件。③面接試験官数は、個人面接では3人が20%、2・5・6人が次いで多い。集団面接では3人が圧倒的に多い。④面接時間は、個人面接では10・20・30分にピークがあるが、特別選抜が長時間かけているのに対しそれ以外の場合には5・10分がピークである。医学系では10～15分が標準である。集団面接では、1グループ15分が最も多く、20～60分の例もある。特別選抜の場合は長時間である。⑤評価結果の表現については、何らかの評点化をしているのが91%、その3分の2は段階評価でそのうち「実施に困難あり」は3分の1である。点数で表記している場合のうちの4分の3は「苦心している」と答え、点数化の難しさを物語っている。⑥追跡調査が進んでいるのは、回答の3分の1に過ぎなかった。⑦「面接を現在も過去も行ったことはない」73件のうち「実施について検討したことがある」が14件あった。⑧実施しない理由は、(ア)必要と思わない20件、(イ)評価が難しい19件、(ウ)実施が困難11件、(イ)と(ウ)両方を挙げるもの12件。

3 小論文

60年度に一般入試で実施した国立大学は60大学(62%)、102学部(29%)で、前年度より2大学6学部増加した。

出題の形式・内容については、すでに数年間の出題経験を経て改善工夫の成果を蓄積しつつある例も見られる(佐賀医科大学、その他)。富山医科薬科大学では資料提示型の出題を続け、分析力・読解力・総合力・独創力を見る工夫を

し、解答者の人間性もおのずからにじみ出ると考えられている。

評価方法については、同大学の庭山清八郎氏他によれば、評価のチェック・ポイントを設け点数化することにより、①正規分布に近い得点分布になる、②合格者は不合格者より高得点側に分布することから、十分識別力のあることが判った。

成績の分析については、小論文成績と共通1次、2次試験の他教科科目や総得点、高校成績との関係を、相関係数、順位相関により継続調査している大学がある。受験者については各種入試成績とに有意の相関が報告された(滋賀医科大学、その他)。逆に農学部のある学科で数学・理科の成績と負の相関が認められた事例もある。また浪人や大学経験者がとくに高得点を得る傾向は認められないとの報告もある(庭山氏他)。

入学後の成績との関係については、社会科専攻の小集団についてはあるが、小論文・現代国語・共通1次の3種の試験のうち、小論文が学業成績・学習態度・意欲とも最も相関が高いとの報告がある(宮崎大学教育学部)。また、相関係数上は有意の相関が出ないが、他の分析方法によるとかなりの関係の存在が認められる場合がある。静岡大学人文学部経済学科の57年度入学60年度卒業者の追跡調査によると、大学成績の平均点は、小論文型>ボーダーライン型>トップグループ型>共通1次型の順で高い傾向がある。大学での科目得点の合計を見ると、小論文型群には低成績者はなく優秀成績者が多い。専門科目での成績優秀者の中には、小論文と外国語から成る2次試験で成績の良かつ

た者が多く、共通1次上位群の者は少ない。2次試験の固有の意義は明瞭だと結論づけられている。庭山氏他によると、小論文と一般教育の間では得点の相関は有意水準に達しないが、基礎医学との間では総じて相関がある。また、進級状況との関係を見ると、57年度入学者の2年次において、小論文の①高得点群（上位4分の1）、②中得点群、③低得点群（下位4分の

1）に分類すると、①群は保留・仮進級・留年などの処置例が他の群より少なくスムーズに進級する傾向が認められた。ただし、他の年度については違う場合もあり、今後の分析が必要視されている。（注、実施大学・学部数等の統計は、文部省大学課調査に基づく。（ ）内は該当の大学・学部総数に対する百分比である。）